

うからが縁重たかるべし

岩手女子師範の教室の窓は初冬の風で音をたてていた。私はもの憂い気持ちで出欠を取っていった。返事する娘たちの声には弾力があつた。欠席者は一名。長欠のようだ。「このひとはどうしたの」と尋ねると、非難めいた視線がいつせいに集中する。

「先生が知らないなんてあんまりです。千葉千代子さんは入院しています。今までは先生の授業だけは病院をぬけて出席していたのです」という言葉に、私はびつくり。しかし、そ知らぬ顔で授業に入った。その子の名前も顔も思い出せなかったから。

その午後、重篤の病室に彼女を見舞つた。見覚えはあつた。笑顔で迎えるその頬は熱のせいだろううす紅く美しかった。数カ月間、私は胸つぶれる思いで見舞つていたが、笑顔を見せない日はなかった。

ずっと後に、彼女が「婦人公論」に発表した「ラザロの記」によると、毎朝私は彼女に牛乳を届けていたこと、私の懐で温かくなっていたそのぬくもりが今なお忘れられないとのことである。そのことをすっかり忘れていたが、そういわれると、確かにそういうことがあつた。

あの頃、21年頃は食料事情最悪だつた。さすが人情豊かな東北の地も旅人には住みづらく、乳児二人を抱えるわれら家族はどん底の食生活にあえいでいた。たまに帰郷していた女生徒が握り飯をくれることがあつた。3歳の長男の「お母さま、まっ白いごはんだねー」と驚く声に、妻は涙だけで答えていた。

盛岡の啄木の旧居付近で牛乳を売っていると聞き、私は朝5時に一升瓶を抱えて並ぶのを日課とした。彼女を見舞うようになってから、3分の1ぐらいを届けていたのであろう。忘れてしまつたぐらいだから、今いう「小さな親切」にそれは数えられるかもしれない。

「善行無轍迹」という言葉がある。私の生涯において真実打算のない善行があつただろうか。全く自信がない。しいてあげねばならぬとすれば、かろうじてこの一つだけはいえるかもしれない。最後の審判において何か善いことをと審問されたら、私はこの一事を弁明に使わせてもらおうと思う。千代子さん、どうもありがとう。やがて私は千葉の師範に転出する。盛岡を去る日、開運橋の両側にはまだ雪が厚く残つていた。

ほの暗い駅頭。見送りの者からいわれて、私は人力車に走り寄つた。角巻に深く埋まつた千代子さんがいるではないか。医者 of 制止をふり切つて別れを告げに来たのだ。つきそう母は眼を赤くしておろおろしている。千代

子さん母子はそういう人である。命たえだえに生きていくというのに、人に対してかくも熱いものをうちに秘めている二人である。

あの日から30年以上も流れている。会う度にこれが最後と別れるのだが、母子一体、二人して一つの命を生きる力は、まぎれもなく奇跡的生を私たちに開示してやまない。

千代子さんには友人が多い。かつてのクラスの友情はいよいよ厚く、友はさらに新たな友を呼びよせ、彼女は孤独を知らない。誰が植えるのか、彼女の小さな住み家へのあぜ道にコスモスが倒れ伏すほど咲き乱れる。帰りぎわに友は言う。「私の方がかえって励まされてしまったわ。逆ね」と。千代子さんは手鏡をめぐらしているものように友の後姿を追うていくにちがいない。

某年、私は息子二人の運転で見舞いかたがた東北を駆け巡った。二人を千代子さんに会わせたかったから、離れに一泊した。こごる真夜中、松籟の中を伝わる千代子さんの間断なく咳こむ声の何と弱く、そして痛ましく、凄惨としかいいようがない。田沢湖からの帰途、息子たちはもう一度会いに寄ろうよ、といつて回り道をしてくれた。千代子さんは青春の人なのだ。

生きて用なき身、役なきわが日々と、あなたは観じ、そして、幾度も観じ直しつつ生きていく。訪ねくる友には黙っていてもそれが伝わっていく。あなたの胸は赤子

の如く友の心をさながらに吸収する。ここは生かし生かされる共感相応の世界が静かに輝いているようだ。こうした世界を求めて、ひとは苦しくとも、長い彷徨を止めないのであろう。

千代子さんは年一回お年賀をよこす。短歌をそえて。数度とだえたこともあった。危機に立っていたのだから。病床からとは思えない水茎のあと美しい。ある年の一首。

残る世も老いゆく母と病む吾とうからがえしに重たかるべし

うからとは血縁。病む娘もすでに50をこした。その母は三十余年わが娘の看病に明け暮れる日夜。いかに血縁とはいえ、娘にとつてわが不治の病よりも苛酷な母の運命に命絶えなんと願いたくもなる。

窓からしか見えない四季の変化、赤松の姿だけは変わることがない。絶望幾千度ふみ越えふみ越えして、ただ今日の一日をのみ願う母子の人生は、ただ壮烈としかいいようがない。

聖フランシスは病が来ても寒さが襲っても、飢えにあつても死を前にしても、すべて「わが友よ」と両手で抱き取ったという。

千代子さん。一家の最愛の支柱である弟さんを、あなたは突然失った。辛酸なあなたの旅路のさ中で、さらにもう一度惨酷な運命を抱きとめねばならない。

ああ、生きるということは幾重にも試され続けることなのか。こんなにも清らかに生きる人びとに対しても、生きることは願うことである。―これは恩師下村湖人の言葉である。願うことの本当の意味を知る者は君。君の病める胸を通して語られる言葉には、だから、いつも温かく清澄なものが流れている。

千代子さんの父（一葉、元盛岡貯金局長）の作に、「この辺の雪蓑はみな海草の草」という名句がある。『昭和百句選』（虚子編）に収められているが、その句についての短文の一節。

「かつて海辺の僻地に奉職していた友が、海草を敷いて夜具代わりにくるまって寝ている家族がごく最近まであった、と語った。耕す土をもたない漁村の生活条件は、綿にも藁にも無縁なほどきびしいものだったにちがいない。風雪の浜辺で働く漁夫たちの着ぶくれた肩をおう檻樓のような海草の雪藁・・・」。

運命の広海に漂う海草のような私たちの生ではある。

（出典と年代は不明）